

# 幼児教育に求められるもの

関口はつ江

現代は高学歴社会で、それぞれの人が社会に出るまで、ほぼ二十年の準備期間をもつようになった。十二、三歳になれば仕事をしなければならなかった時代に比べれば、格段の違いである。生活の糧を得るための労働から解放され、自分らしさを探求し、物事の本質を追求することの許される自由な、保護された状態が長くなっているから、すぐれた個性が輩出してもよいはずと思われているのであるが、種々の調査等によれば、没個性的で、意欲のない若者が増えている現状である。

社会の進歩、文化の発展に伴い、社会に適應するために、子どもに課せられる学習量が増え、社会化のための圧力が強まることはやむを得ないとしても、三、四歳から開始されるに至った集団教育の内容が、これでよいのかどうか、根本的

に考えてみる必要がある。幼稚園振興計画が実施されて以来、確実に就園率は高くなってきたが、逆に子ども問題は増大し、深刻になるばかりなのである。

保育は、簡単に云えば、ねらいが定められ、ねらいに合う活動が選択され、教師が活動を指導して行くもの、と考えられているのが一般である。しかし、そこで教師が定めたねらいや活動は、幼児の本質をふまえてみて、ひとりひとりの人生の積み重ねの基盤となる幼い時期の一日一日に対して、本当にやらねばならないことであるのかどうか、深く問い直されているのであろうか。

社会の流れの中で、勝手にきめられた価値基準の枠（素直な子に、たくましい子に、集団行動のとれる子に……）の中で、こま切りに作られ、制限の多い活動の枠の中に閉じこめ

て展開する保育は、大学に入るための高校教育、高校に入るための中学校教育……と到達点を定めた学校教育のもつ弊害と全く同質のものをもってしていると云えよう。

また、子どもとかわるおとな達は、おとな同志の社会の厳しさに対応する真剣さで、研究や芸術に打ち込む情熱をもって、子どもの世界に相對しているであらうか。多かれ少なかれ、権力者として、保護者としての優位性によりかかって、安易に子どもを扱ってはいまいか。子どもが無知であり、純粹であることをいいことに、ずいぶん勝手な扱いを、それもやむを得ずではなく、教育という名のもとに行なっていることがどれ程あるか、振り返ってみなければなるまい。

幼児の教育は遊びを通して行なうべきものであり、遊びは子どもに任せてしまわずに、適切に指導しなければ発展しない、ということとは保育をする者の常識になっている。しかしこのことは慎重に考えられなければならないことなのである。遊びですら子どもに任せられることなく、おとなが入っていくのであるから、子どもが遊びに打ち込む真剣さと同じの、否、それ以上の真面目さと開いた心をもってその世界に入って行かなければ、真の指導はできないのは当り前のこと

である。しかし、残念ながら本物の遊びの指導のできる保育者は非常に少いように思われる。子どもに無限の可能性があるといいながら、おとなのつまらない常識と情性的なかわり方で、子ども自身にとっての生活の意味を失わせてすらいふことも多いと思う。

幼児教育を担当する者が不真面目であるとか、幼稚園教育要領に異論があると云うつもりはないが、科学にせよ、芸術にせよ、急速な進歩を遂げつつある現代において、子どもの教育にかかわる部分の弱さについて、もっと深刻に受けとめるべきではないかと考える。それは、文明にひきずられることなく、人間の生物学的特性をふまえて、原始的で、混沌とした、人間の根源を深く掘り起こし、支える分野として、如何にして、人間の機械化の流れに對抗して、確実に子どもの本質を守り、人間らしさを育てるかを考え実践することである。

現代社会の不調和を回復するためにも、子どもとかわる領域にある者の主体的な行動が必要とされているのではないであろうか。

(郡山女子短期大学)